

基本理念

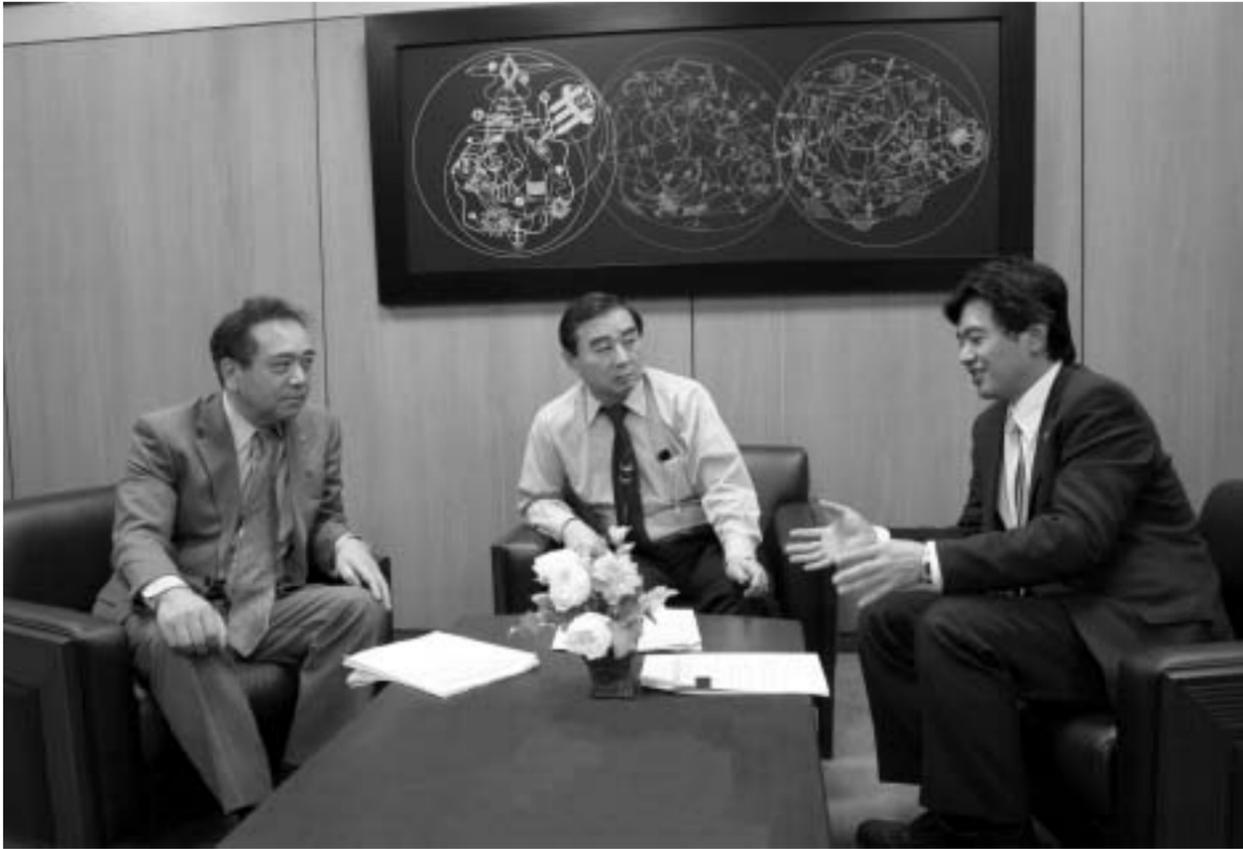
草加市立病院は、市民のいのちと健康を守り、地域医療の中核を担うことを使命とします。

草加市立病院

特別対談

信頼される医療をめざして

- ◎ 東京医科歯科大学医学部附属病院長 坂本 徹
- ◎ 草加市立病院開設者・草加市長 木下 博信
- ◎ 草加市病院事業管理者（兼）病院長 高元 俊彦



(写真) 左から高元病院長、坂本病院長、木下市長

坂本 徹

昭和46年 東京医科歯科大学医学部卒
東京医科歯科大学第1外科入局、その後胸部外科、米国セントルイス大学・スタンフォード大学留学を経て、大学院・胸部臓器置換学分野・教授、現在、医学部附属病院長

高元 俊彦

昭和49年 鹿児島大学医学部卒
東京医科歯科大学第2内科入局、その後スタンフォード大学メディカルセンター循環器内科(文部省在外研究員)、佐々木研究所附属杏雲堂病院、長野厚生連北信総病院副院長をへて現職



患者さんや家族の皆さんが心穏やかなコンサート等も定期的に開催しています。昨年8月の「土曜の午後のコンサート」から。

市民の大きな期待を担って、新しい市立病院が平成16年7月に開院しました。新病院では病床数を以前の209床から大幅に増やして366床とし、さらに最先端の医療設備を整えるなど一層の充実を図る中で、これまで市民の皆さんに質の高い安全な医療の提供に努めてきました。しかし、一方では産科の休止状態が続いていることや、その他の診療科でも診療体制の不十分さから決して満足はいく状況とはいえません。その大きな要因には全国的な医師不足、とくに病院に勤務する医師の不足があげられます。実際に地方の病院だけでなく、大学病院からも医師がいなくなり大学からの派遣がでなくなっている現状が連日のようにメディアを通して報道されています。

このような状況の中、これからの草加市立病院をより良い病院にしていくことをテーマに、病院開設者の木下博信市長、病院事業管理者の高元俊彦病院長、当院に多数の医師を派遣していただいている東京医科歯科大学医学部附属病院の坂本徹病院長に会談していただきました。

市立病院の現状は

医療スタッフは疲労困憊

「新市立病院が開院して2年半、医師不足の影響等により病院運営に大変ご苦労されていると伺っています。まず高元病院長から市立病院の現状についてお話しただけませんか。」

高元 私が発病事業管理者として着任したのは一昨年の10月ですが、当時から産婦人科の休診やその他の診療科を含めて大きな困難が生じており大変な時期でした。外から一見すると大変立派な病院だし何でも出来ると思っていました。実際には殆どの診療科で余裕を持った医師や医療スタッフの配置ができず、思うような運営はできない状況でした。

現在は47名の常勤医師で診療を行っています。それでもこの規模の病院を運営するには小さな医師集団といえます。病院は24時間、365日の受け入れを要求されているわけですが、医師をはじめスタッフは疲労困憊しているというのが現状です。

木下 市立病院は計画の段階から単に病床を増やすというの目的ではなく、地域に必要な高度医療を確保するという観点から二次医療機関(※1)として設置しました。ですから、地元から支援する病院という

が本来の考えでした。しかし、市民の皆さんの意識の中には受診しやすい病院として受け止められ患者さんが殺到するというものになり、病院の医師も疲れるし病診連携にもジェレンマが生じていると感じています。

坂本 草加の病院に限りませんが、勤務医が疲労困憊している様子は大学病院でも発生しています。その極端な例が草加の産婦人科だったのかもしれない。大学から派遣された勤務医が疲弊して医局を離れていく傾向は最近一層強まっています。市民の方が病院に大きな期待を抱いておられるも、病院の本来の役割や現状がきちんと理解されていないのかもしれない。それが、市民にとって期待はずれということになるのでしょうか。ところで、病院の診療体制と状況をもう少し詳しく教えてくださいませんか。

**常勤医は47人、
外来は一日800人**

高元 18診療科で常勤医は47人、一日当たり外来患者数は800人、入院患者は220から240人で推移しています。外来部門ではとくに小児科など時間外診療の比率も高く、また救急車の受け入れ状況は年間4200件ほどとなっています。確かに病床利用率は現在60%を越す程度と低い数字に留まっていますが、我々